



開催日時：7月4日（日）14:00-15:30

参加人数：40名(運営スタッフ含む)

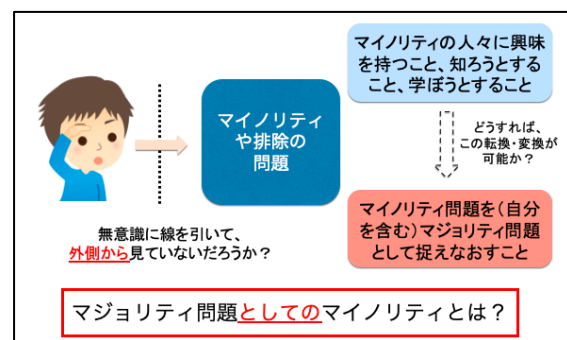
趣旨説明

企画担当の斉藤仁一朗さん（東海大学）より、シティズンシップ教育研究において、「マイノリティ」に注目した研究や、市民育成における規範から「排除」される人々に注目する研究が増えてきた一方で、マイノリティ問題を「第三者的な立場から」論じている瞬間があるのではないかとの問題提起がありました。

今回のスタディ・スタヂオは、この問題提起に沿ってマイノリティ問題を「マジョリティの問題」として捉えなおすこととはどのようなことか、を考えるきっかけとなる場として設定されました。

話題提供

初めに呉永鎬さん（鳥取大学）より、朝鮮学校の保健室をめぐる問題について話題提供をしていただきました。学校教育法上「各種学校」として位置づけられる外国人学校には学校保健安全法が適用されないため、学校保健活動は基本的に自助努力によって実施されます。そのため、経営状況の厳しい外国人学校では、保健室や学校健診は「ないことが当たり前」でした。



ところが京都の朝鮮学校の場合、2009年に排外主義団体による襲撃事件を受け、被害を受けた子どもたちの心のケアの問題をはじめ、学校保健活動の重要性に関する認識が次第に高まっていきます。2016年より学校保健活動のセンターとして開設された保健室には、その開設から運営にいたるまで、元養護教諭や看護師をはじめ多くの日本人が関わっています。しかしそれを美談として称賛するのではなく、外国人学校の法的地位と実態との乖離が子どもの権利を侵害しうる余地を残してしまっている旨、指摘されました。

これらは外国人学校に通う子どもたちの健康や命、すなわち教育権や学習権を支える生存権に関する重要な問題ですが、社会的な関心が高いとは言えません。こうしたマイノリティが直面してきた様々な問題を、社会の問題として捉えるためにはどうすれば良いか、障害の社会モデル、連累、責任（response+ability）といった視点から論点が提示されました。マジョリティとは抑圧されてきた人々やマイノリティの声を聴かずにいられる人と捉えられますが、それでは聴かずとも良かった声が聞こえた時、どのような応答可能性を示せるの

か。マジョリティ中心につくられた社会の秩序や、それに基づき生起する構造的差別に気づいた時、私たちはどう行動していいのか。考究していかなければならないと、話題提供は結ばれました。

その後呉さんのお話に関連する形で、北山夕華さん（大阪大学）より、シティズンシップ教育の現状を紹介していただきました。日本ではイングランドのシティズンシップ教育が特に注目されてきましたが、本来そこにある帝国主義の過去と現在の関係といった内容や、旧英国領出身者の政治的権利のような社会的前提が無視され、日本の文脈における植民地支配や外国人の権利を扱うことも避けられる傾向がみられるとのことでした。このように日本では、既存の秩序や権力関係の変更、マジョリティの態度変容を求めない範囲でシティズンシップ教育が「輸入」されてきたという点が特徴として指摘されました。

質疑応答

想定以上に沢山の質問をいただき、一部を取り上げるにとどまってしまったが、議論は大いに盛り上がりました。例えばマジョリティが（不均衡があることを自覚した上で）、マイノリティに歩み寄ろうとした時、どうすれば良いのかという質問がありました。話題提供者からはまずはマイノリティの声を聞こうとすることの重要性が語られました。また目を逸らしがちな歴史に目を向けて、それを教材化していく取り組みがあることも紹介されました。その他にも政治的中立性に対してセンシティブな日本の教育現場でマイノリティの問題を扱うことは可能かという質問に対して、日本の教育現場においては、「これは中立的ではないからやめておこう」という傾向があること、また扱ったとしても「みんな違ってみんな良い」によって権力構造が隠されてしまう可能性があることを指摘し、今後もっと取り組んでいかなければならないとの議論がされました。

(Vol.10.の主な運営スタッフ：浜田・別木・小田切・斉藤 報告担当：浜田)